

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	村中智彦
2. 審査委員	主査：（上越教育大学教授） 大庭重治 副主査：（上越教育大学教授） 加藤哲文 委員：（上越教育大学教授） 越良子 委員：（岡山大学准教授） 吉利宗久 委員：（兵庫教育大学准教授） 井澤信三
3. 論文題目 知的障害児の教育臨床における先行操作に基づく課題遂行の促進	
4. 審査結果の要旨 論文提出による学位申請者 村中智彦 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：平成25年12月26日（木）16時10分～16時40分 場所：上越教育大学 特別支援教育実践研究センター 研修室 1. 学位論文の構成と概要 本論文は、以下に示す7章から構成されている。 第1章 知的障害児の課題遂行の促進に関わる指導 第1節 知的障害児に対する課題学習の内容 第2節 課題学習の指導形態 第2章 課題遂行の促進に関わる先行操作 第1節 先行操作とその関連概念 第2節 先行操作に基づく指導の特徴 第3節 先行操作に関する研究の成果 第3章 問題の所在及び本研究の目的 第1節 課題遂行を促進する先行操作 第2節 個別指導における先行操作 第3節 小集団指導における先行操作 第4節 本研究の目的	

第4章 個別指導における先行操作

第1節 試行間隔の設定（研究Ⅰ-1）

第2節 最適な試行間隔の設定（研究Ⅰ-2）

第3節 セット間の設定（研究Ⅱ）

第4節 課題の選択機会の設定（研究Ⅲ）

第5章 小集団指導における先行操作

第1節 課題遂行機会の設定（研究Ⅳ）

第2節 やりとり機会の設定（研究Ⅴ）

第6章 総合考察

第1節 個別指導における先行操作と課題遂行に及ぼす効果

第2節 小集団指導における先行操作と課題遂行に及ぼす効果

第3節 先行操作に基づく指導プログラム

第7章 結論と今後の課題

第1節 結論

第2節 今後の課題

引用文献

各章の概要は以下のとおりである。

第1章では、知的障害児の課題遂行の促進に関する従来の研究を概観し、知的障害児や知的障害を伴う自閉症児を対象とした課題学習の内容とその指導形態、個別指導及び小集団指導における課題内容とその手続きに関する成果や課題について論じた。

第2章では、課題遂行に関わる先行操作と、その関連概念である状況事象、弁別刺激、確立操作、結果操作について整理した。また、先行操作に基づく指導に関連して、課題遂行の促進と問題行動の予防、課題への動機づけと嫌悪性の低減のふたつの特徴を示した上で、先行操作に関する研究の成果と課題について指摘した。

第3章では、課題遂行を促進する先行操作に関連する問題の所在と本研究の目的を示した。まず、問題の所在として、個別指導に関しては、試行間隔（Inter Trial Interval, 以下、ITI）の設定、セット間の設定、課題の選択機会の設定について、また、小集団指導に関しては、物理的環境の設定、係による課題遂行機会の設定、対象児同士のやりとり機会の設定について指摘した。次に、本研究の目的として、個別指導と小集団指導それぞれの指導形態の特徴に応じた先行操作を知的障害児に適用した際の課題遂行における効果を明らかにすること、また先行操作に基づく個別指導と小集団指導の各プログラムの在り方について提案することの2点を示した。

第4章第1節の研究Ⅰ-1では、知的障害児2名を対象として、個別指導の中で、対象児が任意に課題遂行できるITIである対象児任意遂行条件を実施し、課題遂行の潜時2秒以内の反応数、単位時間当たりの試行遂行数、正反応率について検討した。続く第2節の研究Ⅰ-2では、研究Ⅰ-1

の結果を踏まえて、知的障害児2名を対象として、対象児の逸脱反応を防ぎ、課題遂行を高める最適なITIの設定について検討した。第3節の研究Ⅱでは、知的障害児2名を対象として、個別指導のセット間において、対象児が課題準備を遂行することに伴うセット間の逸脱反応に及ぼす効果、及び試行時間における逸脱反応と課題遂行に及ぼす効果を検討した。第4節の研究Ⅲでは、知的障害を伴う自閉症児1名を対象として、個別指導において課題の選択機会を設定し、対象児自らが課題の選択を行うことそれ自体が課題遂行を高めるかどうかについて検討した。

第5章第1節の研究Ⅳでは、知的障害児5名の小集団指導において、指導室内の机や椅子の配置、視覚手がかりの活用といった物理的環境設定の改善が対象児個々の課題遂行や逸脱反応に及ぼす効果を検討した。また、物理的環境設定の改善を行った上で、係の設定が対象児の課題遂行機会を増やすかどうかを分析し、係の設定が可能となる条件や適切な指導手順について検討した。第2節の研究Ⅴでは、研究Ⅳの結果に基づき、指導室内の物理的環境設定と係の設定を先行して行い、その上で、指導者ではなく対象児がお互いに弁別刺激となる視覚手がかりの導入や指導者の位置取りの変更が、対象児同士のやりとり反応に及ぼす効果について検討した。

第6章第1節では、研究Ⅰ～Ⅲの結果に基づいて、個別指導における先行操作と課題遂行に及ぼす効果として、ITIの設定とその効果、セット間の設定とその効果、課題の選択機会の設定とその効果について考察した。第2節では、研究Ⅳ～Ⅴの結果に基づいて、小集団指導における先行操作と課題遂行に及ぼす効果として、課題遂行機会の設定とその効果、やりとり機会の設定とその効果について考察した。第3節では、先行操作に基づく指導プログラムとして、個別指導及び小集団指導におけるプログラムについて総合的に考察した。

第7章では、本研究の結論を示した。まず、個別指導に関しては、ITIの設定は対象児が任意に課題を遂行できる条件が最適であること、セット間では、対象児が課題準備を行うことにより逸脱反応の生起を防ぐことができること、また、対象児が課題の選択を行うこと自体が課題遂行を促進することを指摘した。一方、小集団指導に関しては、物理的環境設定の改善は課題遂行の自発を促す弁別刺激となり、課題遂行に要する反応努力を下げ、逸脱反応を生じにくくすること、及びそれに基づく係の設定は対象児同士のやりとり機会を増加させること、対象児同士のやりとり機会において、視覚手がかりを導入したり、指導者の位置取りを変更したりすることにより、指導者のプロンプトに依存しない自発的なやりとり反応が促進されることを指摘した。さらに、従来の研究では、個別指導を行い、その後小集団指導へと展開するプログラムの連続性が強調されていたが、本研究の結果より、両指導形態では対象児の課題遂行や逸脱反応の生起に影響を及ぼす先行操作が異なることが明らかとなったことから、さらに各指導形態の特徴に応じた先行操作をプログラムに盛り込むことが必要であると指摘した。

2. 審査経過

本研究の審査は、次の観点について行った。

1) 研究目的の妥当性と論文構成の整合性について

最初に、知的障害児の教育臨床において、課題学習の遂行を促進するための指導手立ての検討

が重要な研究テーマのひとつであることを指摘している。この問題を受けて、本研究は、知的障害児を対象として、個別指導と小集団指導のそれぞれの指導形態の特徴に応じた先行操作を適用し、対象児の課題遂行に及ぼす効果を明らかにするとともに、先行操作に基づく個別指導と小集団指導を盛り込んだ包括的な指導プログラムの在り方について提案することを目的としており、研究目的の妥当性が認められた。また、論文の構成については、個別指導と小集団指導の指導形態ごとに、先行操作が課題遂行に及ぼす効果を5つの実証的研究によって検討し、それらの成果を踏まえて、最後に個別指導及び小集団指導のプログラムの在り方について提案しており、研究目的と論文構成には確かな整合性が認められた。

2) 研究の独創性と発展性について

従来の知的障害児を対象とした先行操作に関する研究では、課題場面において生じる問題行動や逸脱反応を取り上げた研究が多く、課題の遂行を促進する観点からの検討は極めて不十分な状況に留まっていた。また、指導形態の関連性について、従来は「個別指導から小集団指導へ」という指導プログラムの順序性についての有効性は指摘されていたが、各指導形態の特徴に応じた先行操作を明らかにするための検討がなされていなかった。そこで、本研究はこれらの問題を解決するために、個別指導と小集団指導それぞれの指導形態の特徴に応じた先行操作を適用することによって知的障害児の課題遂行を促進するための方法を実証的に検討している。この点に従来の研究にない独創性が認められるとともに、学校教育における実践的応用において、その発展性が期待された。また、知的障害児の課題遂行の促進のみならず、今後は課題遂行時の正反応率の向上を促す支援方法や知的障害児の発達特性に応じた支援方法の開発も期待された。

3) 教育実践への貢献について

本研究は、一連の実証的研究の成果より、知的障害児を対象とした先行操作に基づく個別指導と小集団指導を組み合わせた包括的な指導プログラムの在り方について提言している。本研究で得られた知見は、知的障害児を対象とした教育相談での指導における基礎的資料を提供するのみならず、特別支援学校や特別支援学級等、学校教育における知的障害児に対する日々の指導の方向性も示唆しており、今後の知的障害児教育における指導方法の開発・改善に対して大きな貢献が期待された。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、村中智彦の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。